



Title	[書評] R.バトラ著 『国際貿易の純粹理論』
Author(s)	小田, 正雄
Citation	関西大學經濟論集, 25(1): 117-119
Issue Date	1975-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/14874
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書 評

R. バトラ著「国際貿易の純粹理論」

小 田 正 雄

1

本書は、国際経済学の純粹理論の分野における、体系的で、理解しやすい優れたテキストである。

体系的であるというのは、Jones, R. によって展開され、ポピュラーになった2部門一般均衡貿易モデル (Jones, R, "*The Structure of Simple General Equilibrium Model*", *Journal of Political Economy*, (Dec.), 1965) にそくして、全体が統一されていること、また理解しやすいというのは、式の展開と図による説明がうまく組み合わされており、したがって、理解が容易であるということである。これが第1の特徴である。第2の特徴は、最近の国際経済学の分野で新しい展開がはかられている新分野、例えば、*intermediate product*, *factor market imperfection*, *product market imperfection non-traded good*, および *theory of effective protection* などが全てとり入れられていることである。

この中、*effective protection* については、Corden, W. M., の *The Theory of Protection*, 1971, および、山本繁緯氏の『貿易政策の理論』, 1974, があるが、しかし、その他の分野については、Batra のこの書物ほど統一的な扱いをした文献は、いまのところ見当たらない。そしてその際ユニークな点は、*intermediate good*, *factor market* や *product market imperfection*, および、*non-traded good* の存在を *Jones Model* にとり入れたとき、そうでない場合に成立した国際貿易理論の基本的な定理—リプチンスキー定理、ストルパー・サムエルソン定理、および、ヘクシャー・オリーン定理—が成立するかどうかを検討していることである。

このような点からいって、本書は今日国際経済学の純粹理論の分野における第一級のテキストであるといえるのではないだろうか。Kemp, M. C., *The Pure Theory of International Trade and Investment* 1969, に比べて、本書は初心者向きで、とりつきやす

い。したがって、国際貿易理論のフロンティアを知る上で、非常に有益な文献ではないかと考えられる。

ただ、若干のミスプリントがあり、また、最後の章などは、Oniki-Uzawa, “*Pattern of Trade and Investment in a Dynamic Model of International Trade*,” *Review of Economic Studies*, (Jan), 1965, の展開以上には出ていない。しかし、国際経済学の道具はかなりよく整理されており、これらの道具をうまく使えば、いくつかの問題にアプローチすることもできるのではないと思われる。そこで、1つのアプリケーションを考えてみたい。

2

わたくしは、リプチンスキー定理と “*Findlay-Grubert*,” の研究 *Factor Intensities, Technological Progress, and the Terms of Trade*”, *Oxford Economic Papers* (Feb), 1959, をミックスすれば、直接投資のマクロ的効果を明らかにできると思うのであるが、本書の第6章で行なわれている議論を利用すれば、直接投資の産出量、交易条件、および、厚生水準に与える効果が解明できるであろう。

ところで最近大きな関心を集めている直接投資は、その中味をつきつめてみると、結局ある産業に *specific* な、優れた生産技術と、一般的な生産要素としての資本がミックスした形で移動するものと考えることができる。直接投資が間接投資から区別される基本的な点は、それが *specific factor* を含んでいることであり、このことが、何故直接投資が相互文流的となるか、特定産業に集中するのといった点を明らかにする。したがって、直接投資の効果は、*specific factor* の移動の効果と、*general factor (capital)* の移動の効果の2つのルートを通じて把握することができる。その2つの効果が2財の産出量にどのような影響を与え、これと需要サイドを考慮したときに交易条件がどのように変わり、その結果厚生水準がいかなる影響を受けるかということが、直接投資の一般均衡分析のねらいである。したがって、そのような分析の枠組が、一般化されたリプチンスキー定理と、Findlay-Grubert の研究によって与えられていることはいうまでもない。わたくしもこの線にそった一つの試論を試みている。(関西大学経済論集 1975.3)

さて、直接投資は比較優位にどのような影響を与えるであろうか。この点を明らかにするには、直接投資を含む形で比較優位を考える必要があるが、しかしそのとり入れ方は、やはり直接投資が一般的な生産要素としての資本と新技術の移動の両側面を持っている点に着目すればよい。このことから、本書の *chap. 2* の (2, 33) 式

$$(p_1^* - p_2^*) = \frac{(K^* - L^*) + (\pi_K - \pi_L)}{(\lambda)(\sigma_D + \sigma_S)} + \frac{\sigma_S(\pi_2 - \pi_1)}{(\sigma_D + \sigma_S)} + \frac{Y^*(\eta_1 - \eta_2)}{(\sigma_D + \sigma_S)}$$

は、財価格比率の変化が、要素供給量そのものの変化($K^* - L^*$)、技術進歩が要素節約(=供給)に与える効果($\pi_K - \pi_L$)、両財における技術進歩率の違い($\pi_2 - \pi_1$)、および、所得効果($\eta_1 - \eta_2$)の和として決定されることを明らかにしている。ここで $\eta_1 = \eta_2 = 1$ とし、更に技術水準の向上が、Hicks neutral であると仮定すれば、

$$(p_1^* - p_2^*) = \frac{(K^* - L^*)}{(\lambda)(\sigma_D + \sigma_S)} + \frac{(1 + \sigma_S)(\pi_2 - \pi_1)}{(\sigma_D + \sigma_S)}$$

となるから、右辺の分母が正であるとすれば、比較優位の変化は($K^* - L^*$)と($\pi_2 - \pi_1$)の大きさによって決まる。

さて、直接投資を受入れると、それは general factor の存在量、したがって、($K^* - L^*$)に影響し、同時にどの部門(1,2)において直接投資が行なわれるかによって($\pi_2 - \pi_1$)が変わるので、この式から、直接投資の比較優位に与える効果の方向が示されることになる。

3

実をいうと、昨年本学経済学部でわたくしが担当した国際経済論のタネ本の1つに、この本を使ってみた。時間の関係もあって、その全部の内容を講義することはできず、また授業では主に図によって説明した。しかし使ってみて、非常によくできたテキストであるという印象を受けた。

(May. 20. 1975)